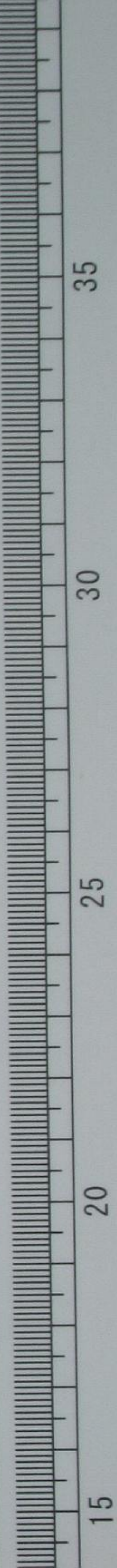




家庭歌唱
大和錦
全

柳田文庫
文庫11
A1597



文庫11

A 1957



光格天皇御製

あなまのたね

おろそ

あなまの

あなまの



48-9057

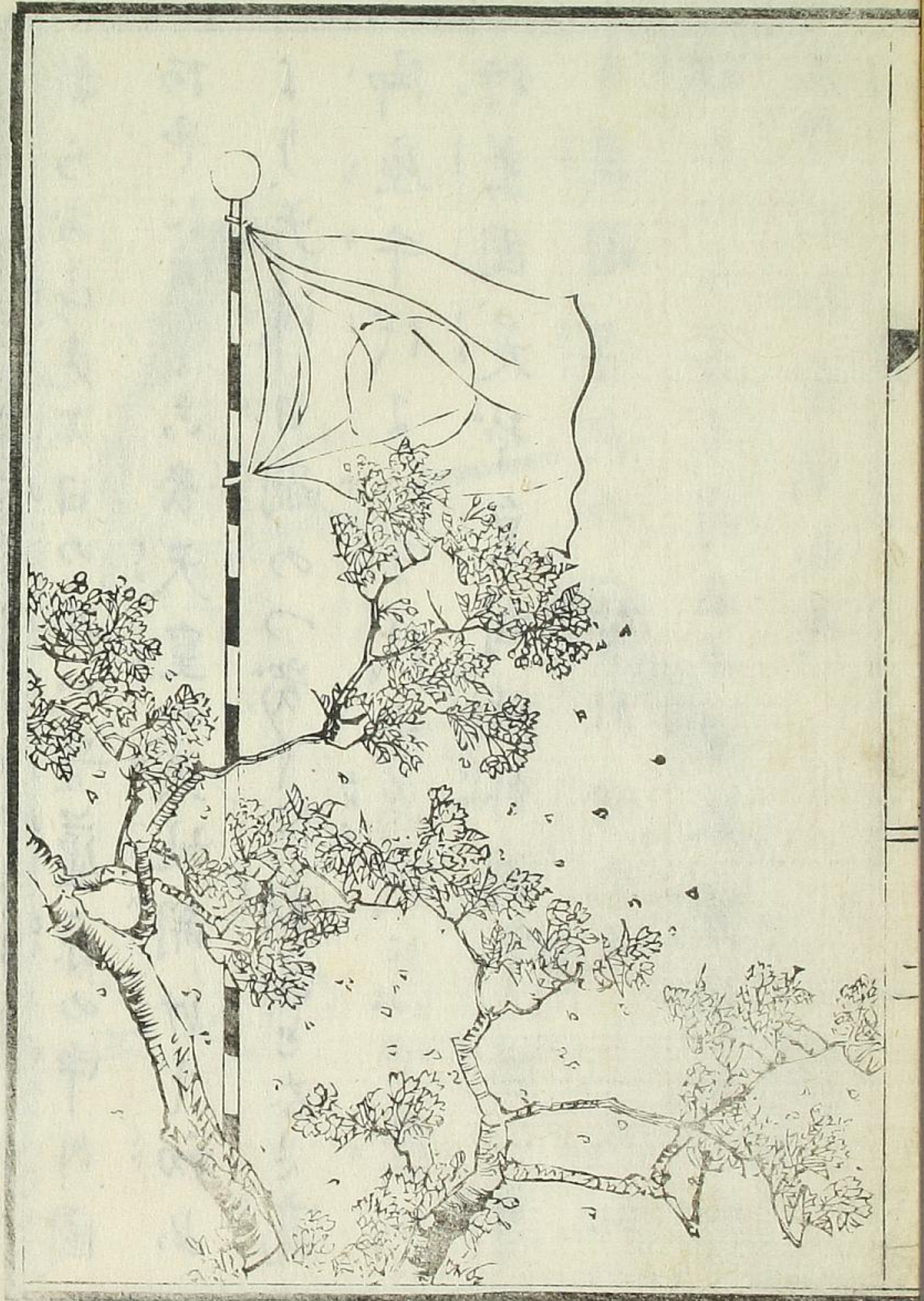
家庭唱歌
大和錦

長瀬氏藏版

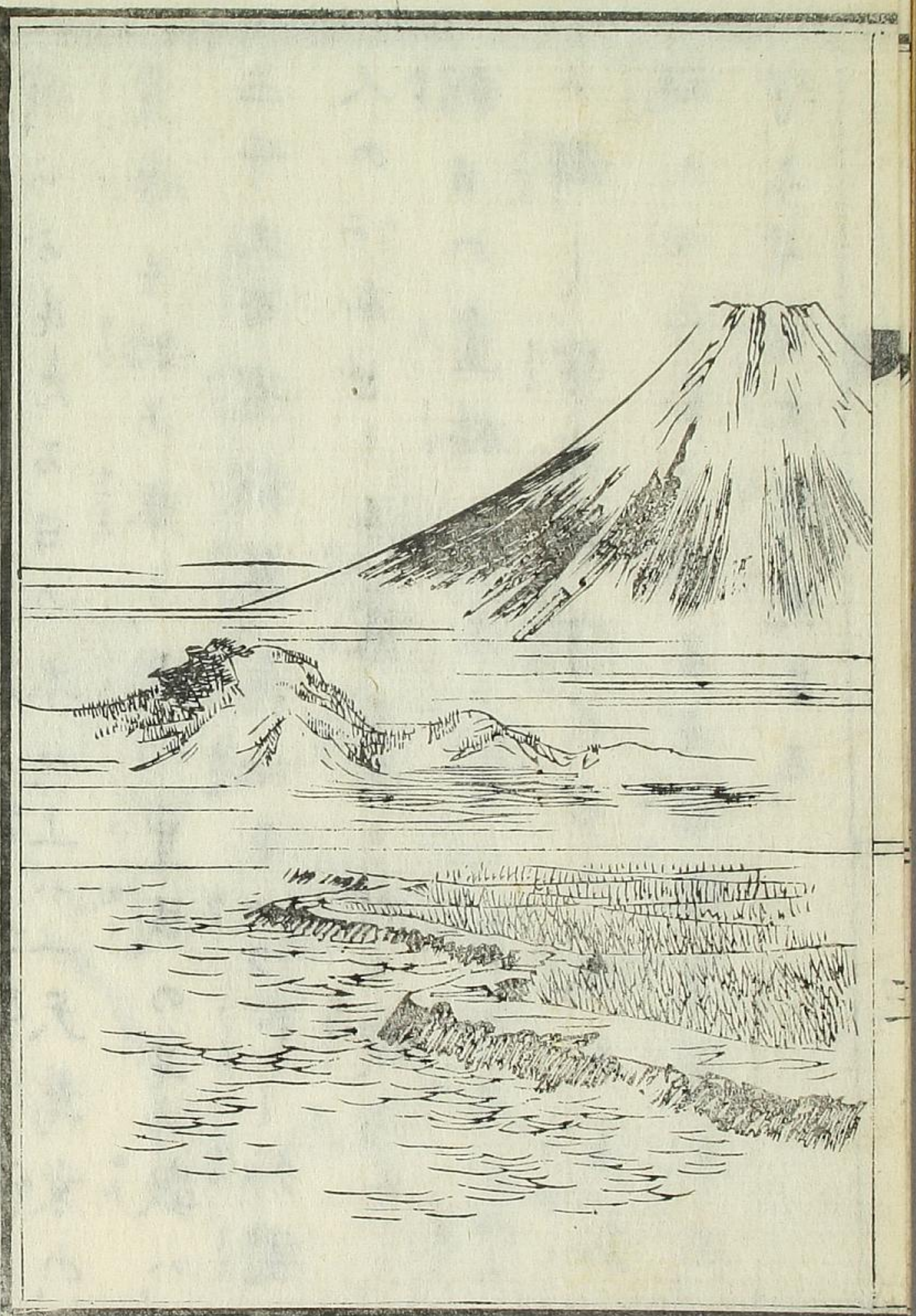
我らふは免る日の本ハ豊原の中川國
 阿也にありし未天^{天皇ハ}天地開けし初め
 より天津日嗣のつぎに動まともき高
 御座千代は八千代小萬代にいや榮へ
 行美^國是^は皇國は外國より勝て尊
 き美^國守れや守れ日本の本を大和
 魂たのみふく守るそ日本男兒なる守
 るぞ大和男兒なる、



我らこれがま免る日の本ハ上ハ一天萬乗の
 皇帝を始め奉り國の皇民のその數ハ
 三千九百有餘萬萬心を一つにし外國
 人の何もどりを露むらりだも受るふし
 朝日の皇旂をましるに亞細亞の空
 不輝し守れや守れ日の本を大和
 魂だをみふく守るぞ日本男兒をる
 守るぞ日本男兒をる



我らお出るる日の本ハ氣候温和に土地
 開け草木繁茂五穀富山ハ秀々水清
 く人ハ心も柔しく神代おららぬ
 國体に上下のやちめ嚴し禮義廣
 耻の風厚し異國人も尊了君子ハ
 國と稱一り守れや守れ日の本
 を大和魂たやみおく守るを大和男兒
 たる守るは大和男兒たる



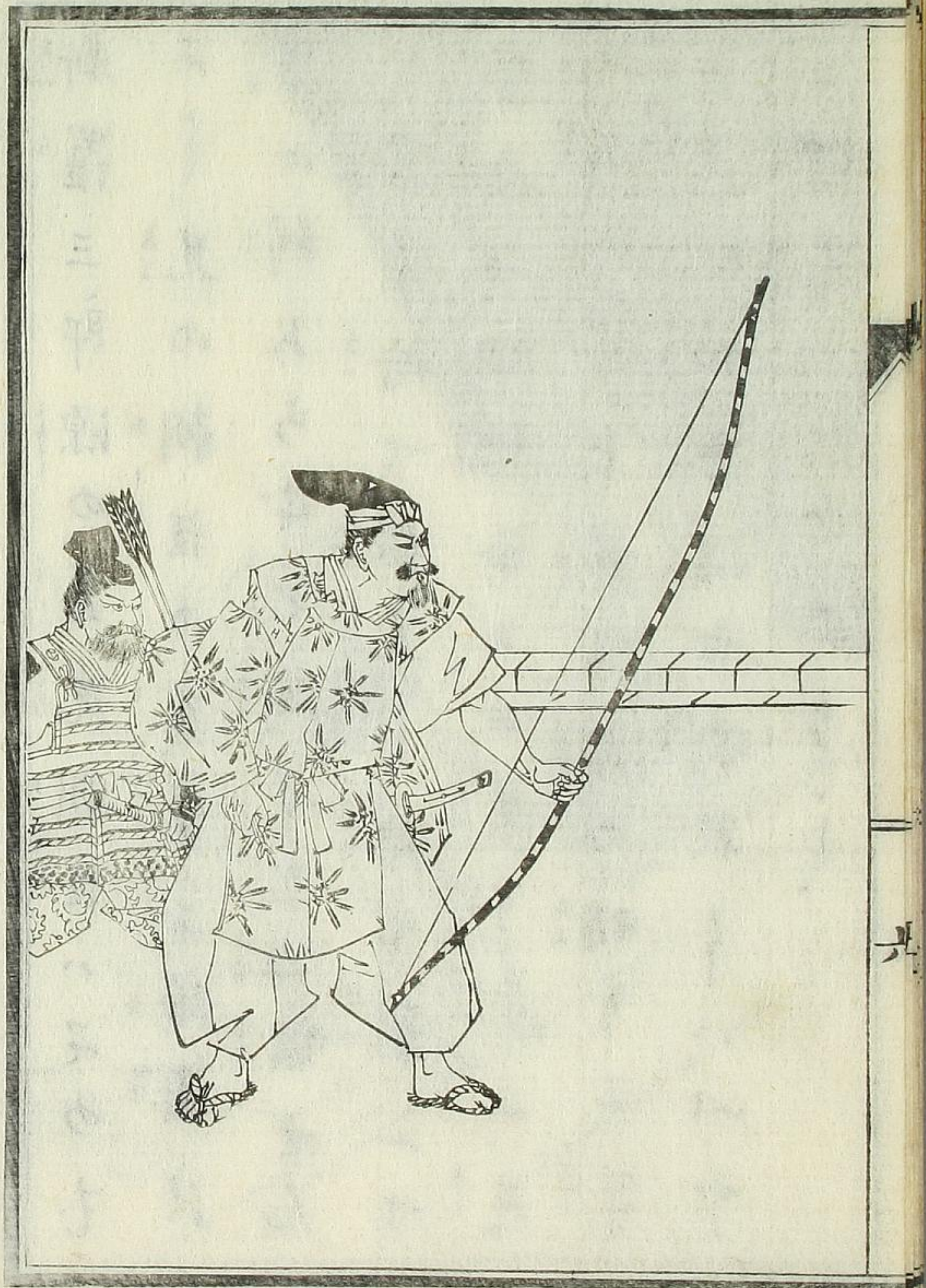
清和源氏の嫡流に、義家朝臣ハそのむの
 し、父の朝臣の頼義が、八幡神の御剣を、
 賜ふと夢みて生れりり、石清水なる
 神前に、元服ありてその名をぬ、八幡
 太郎と稱へりる、陸奥の軍の大將に
 前後合せて十二年、天地も君が義に
 動き、鬼神も君の忠に泣き、將士も民
 もおしなげに君の恩威に靡きりり、

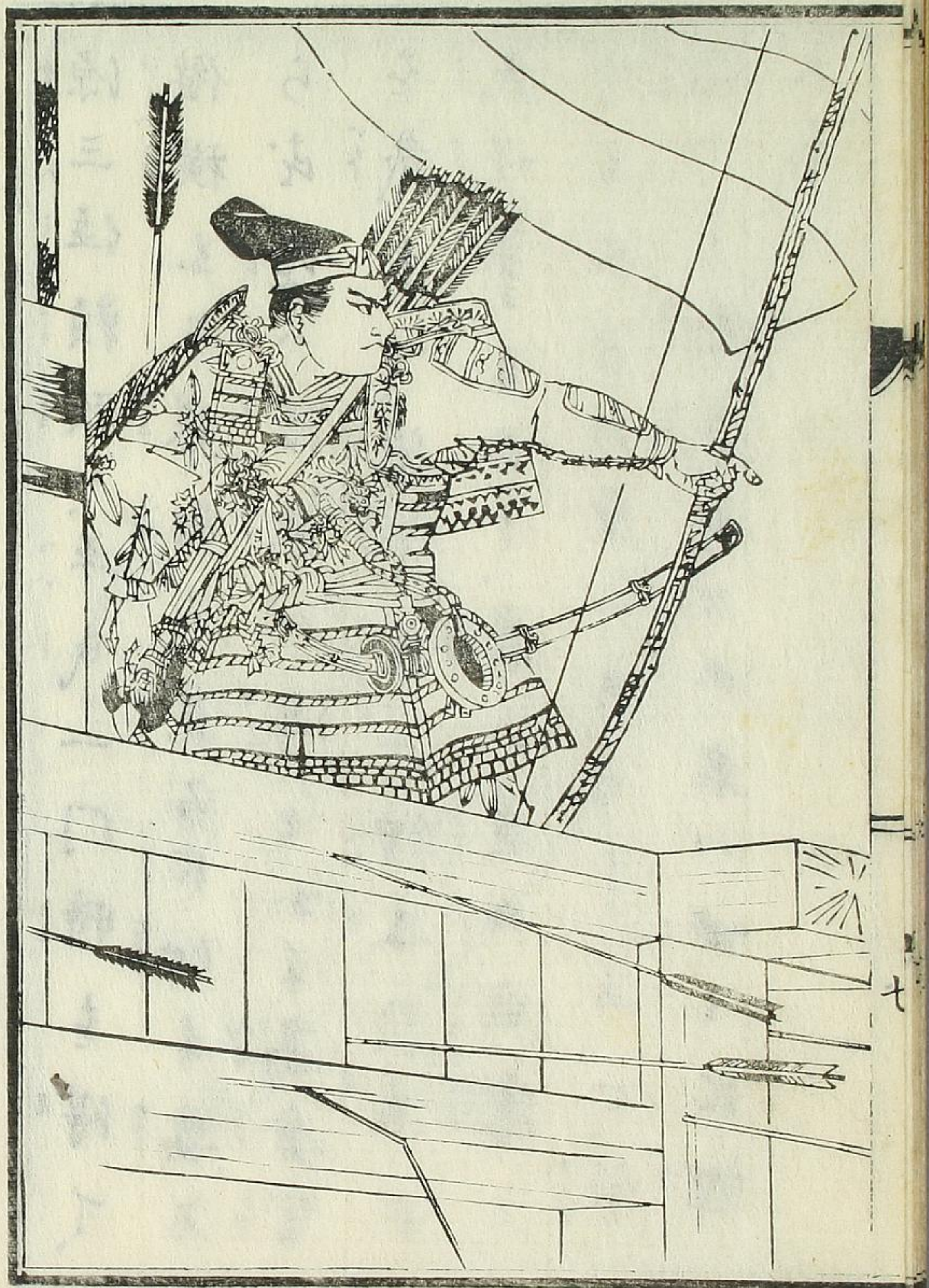


新羅三郎源の、義光朝臣ハそのむ
 ろし、兄の朝臣の義家、陸奥に
 軍の利あらむと、伺より力協せん
 と、官を捨て旅立し、跡を慕ふて
 豊原の、時秋なるが来りし、足
 柄山小坐を占て、月の明り小笠
 を吹、秘曲を傳て別れしハ、以
 り優美のふとありし、



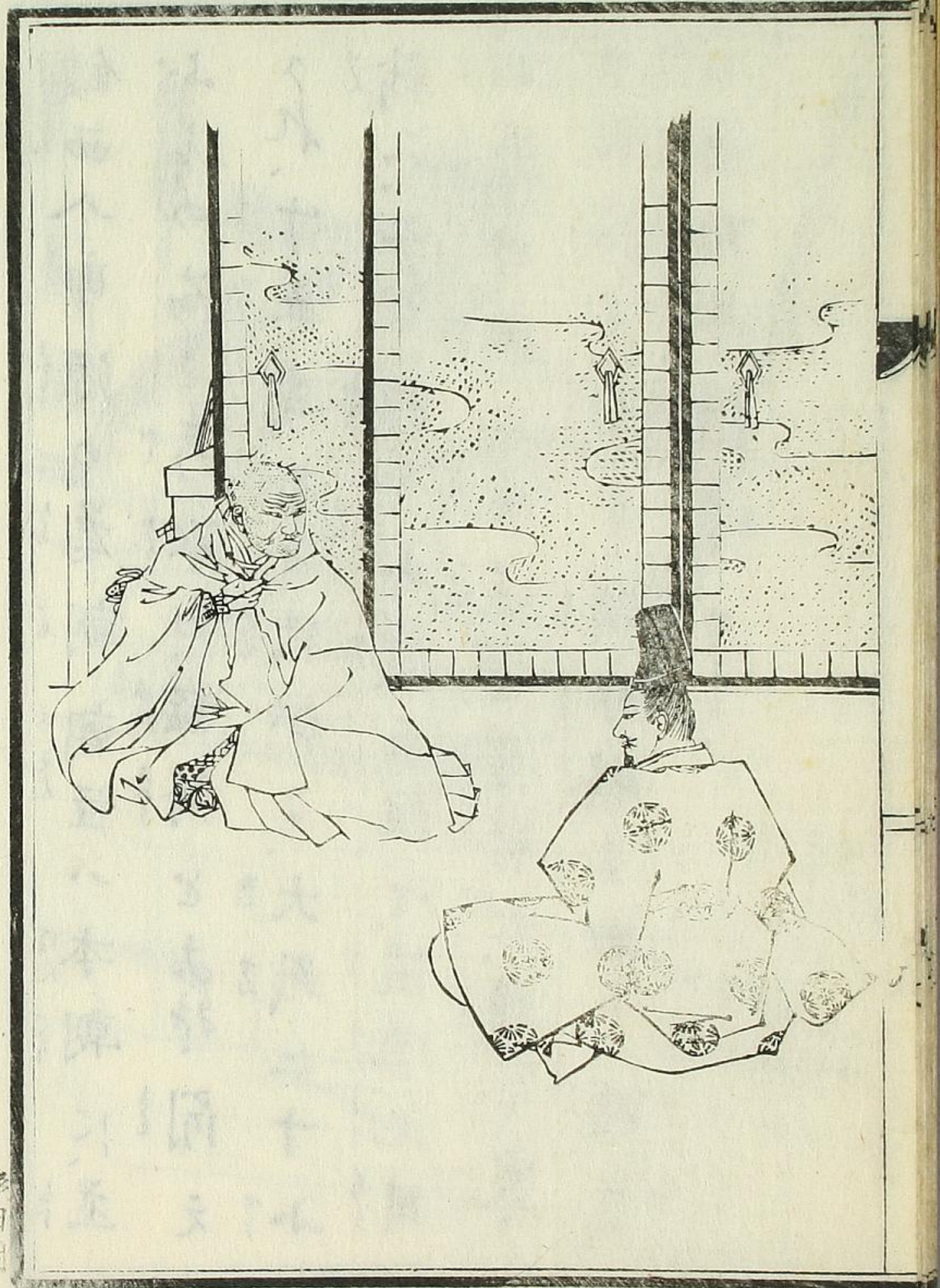
源三位頼政ハ平氏一門時を得て、
 僭横ふる擧動を見るに心も安あ
 らむ頃ハ治承の年とかよ、高倉宮
 を戴きて、擧一軍ハ埋木の哀れ
 死咲事もふく、扇の芝の白露と、
 少もにその身ハきえーあと、首
 唱一勤王の、その名ハ世々に輝
 たり、



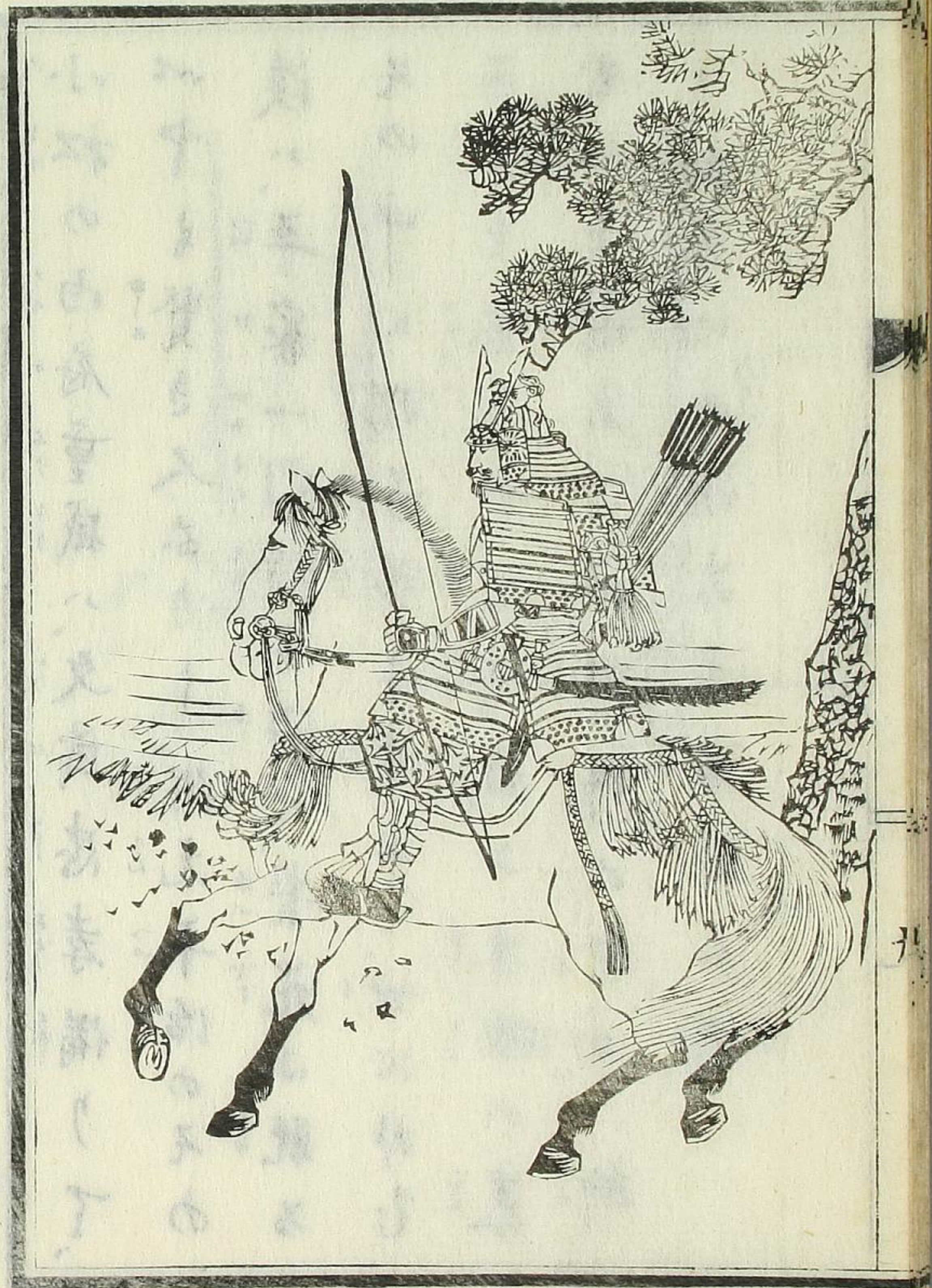


鎮西八郎源の、為朝朝臣ハ本朝に、並
 ぶものなき弓取の、猛將とあはれ
 りれ、十五歳なる比ひ、大戦二十小
 戦ハ、二百餘りの數を經て、筑紫九州
 討靡け、船をも通さ、弓勢に、膽を寒
 さぬ人もあ、後琉球にお、渡り、
 武き功を残り、

小松の内府重盛ハ、文武忠孝備り了、
 以中も賢き人なりし、保元平治のその
 後ハ、平家一門時を得て、紫花小耽る
 その中に、獨子弟を戒めて、世に持む
 うしと思きや、父清盛ハ専横ハ、暴
 義心を疎め、蘇我熊野の宮に祈
 りぬる、心の内ハ哀れなれ、



畷田村

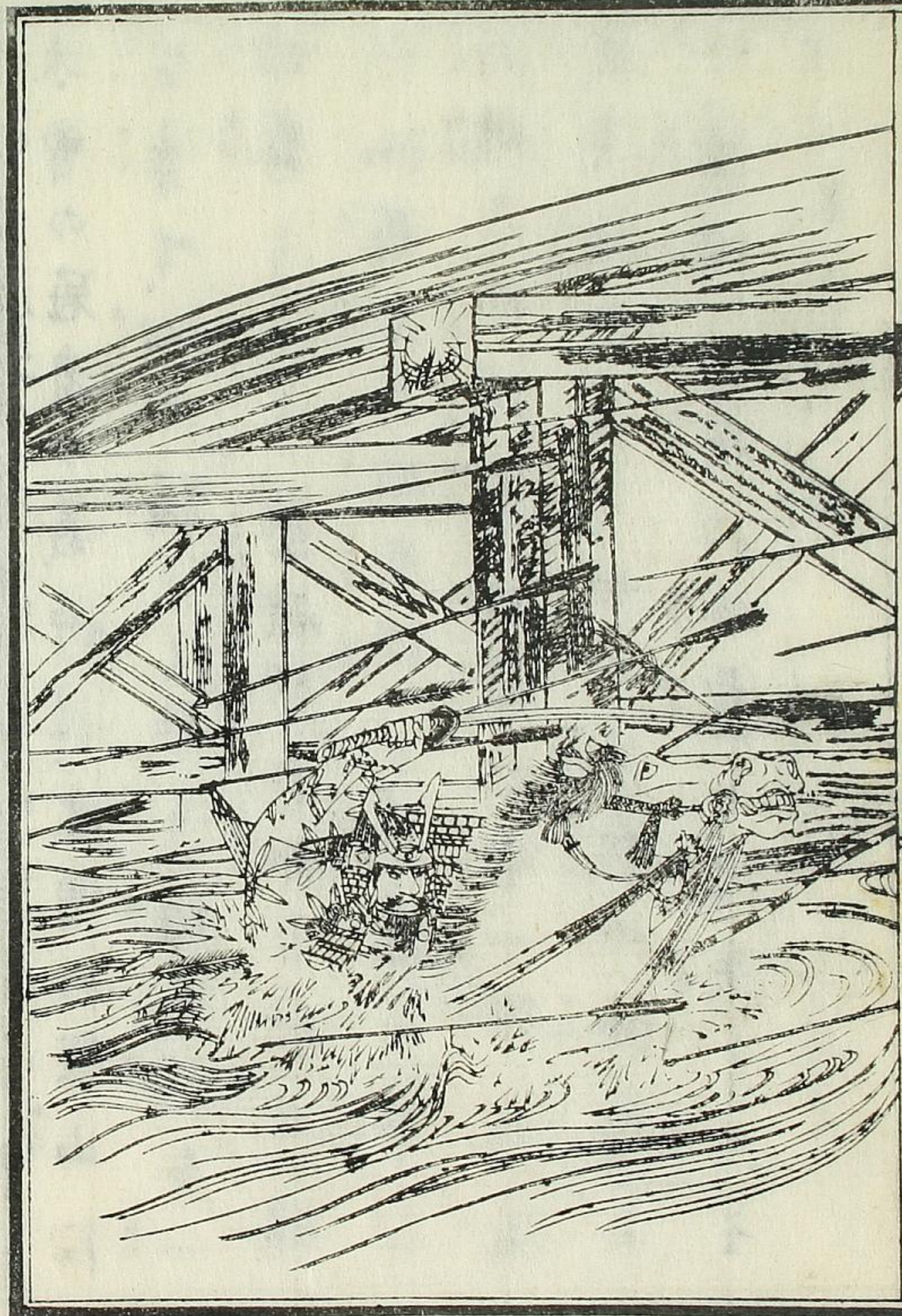


九郎判官源の、義経朝臣ハそのむ
 の、鶴越に壇の浦、家の仇あるま
 氏をば、討てて會稽の辱を雪ぎ
 一のひもあく、梶原父子の讒言に、
 兄頼朝、容れられず、陸奥きいて
 天離る、蝦夷の島とおい渡り、立
 功の武き名ハ、韃靼までも車轉け
 り、

木曾の冠者の義仲は、木曾の深山に
 生育て、心も猛くもやり雄の旗を一
 回擧げしより、勢破竹の如くにて、俱
 利伽羅谷に般若野よ、平家の軍を
 打破り、旭将軍伊豫の守、一時は威
 武を振ひしと、世に九龍の悔あり
 や、粟津の原は白露と消失し、其
 ところをりれ、



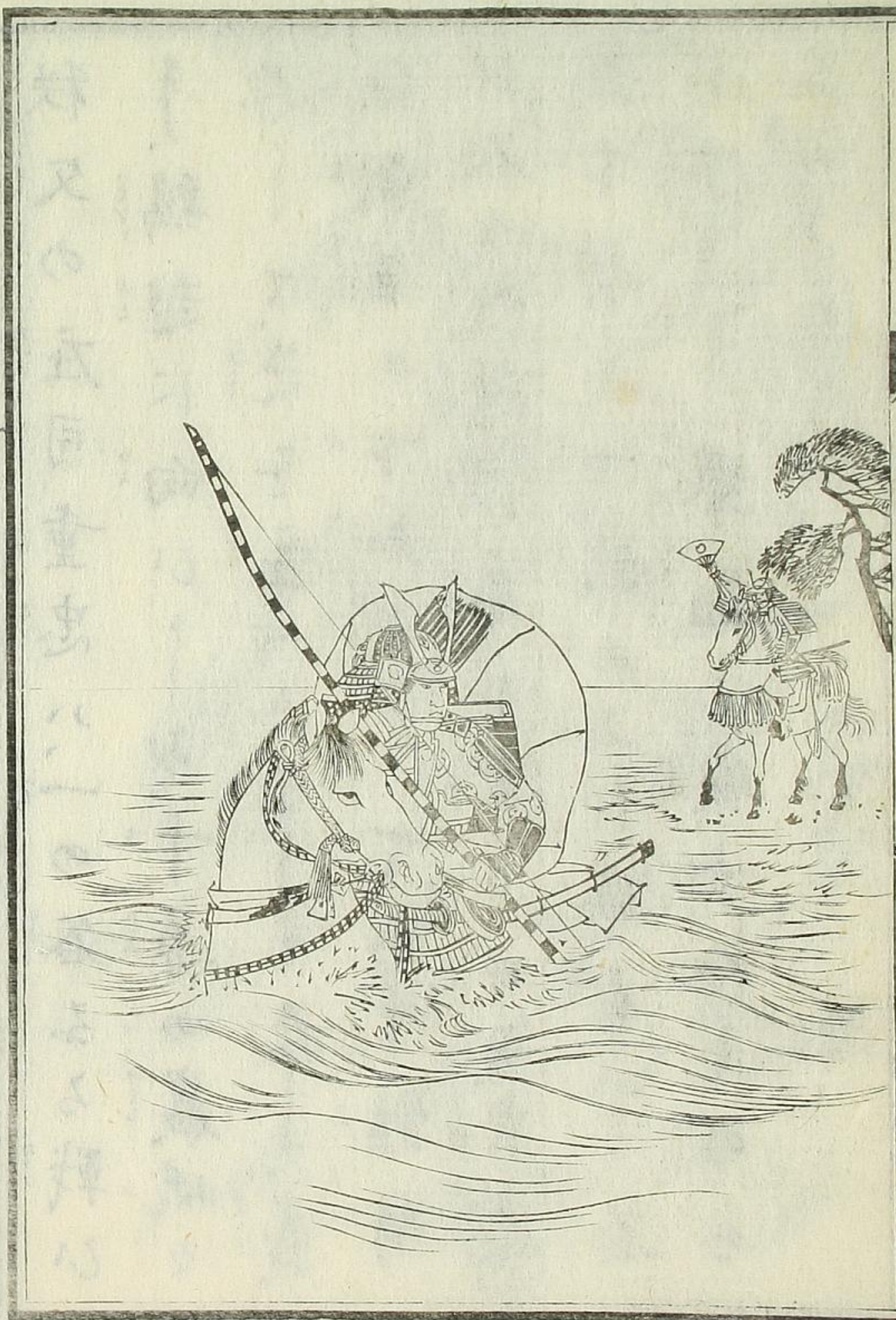
佐々木の四郎高綱ハ、義経朝臣に
 随ひて、頃ハ元暦元年、義仲討
 手の命を受、世にも名高き池月
 の、駿馬を君に賜りて、以て勇
 みに勇とたち、宇治の川波蹴
 立つ、先陣あゝて、武士の譽れ
 を世に傳へり



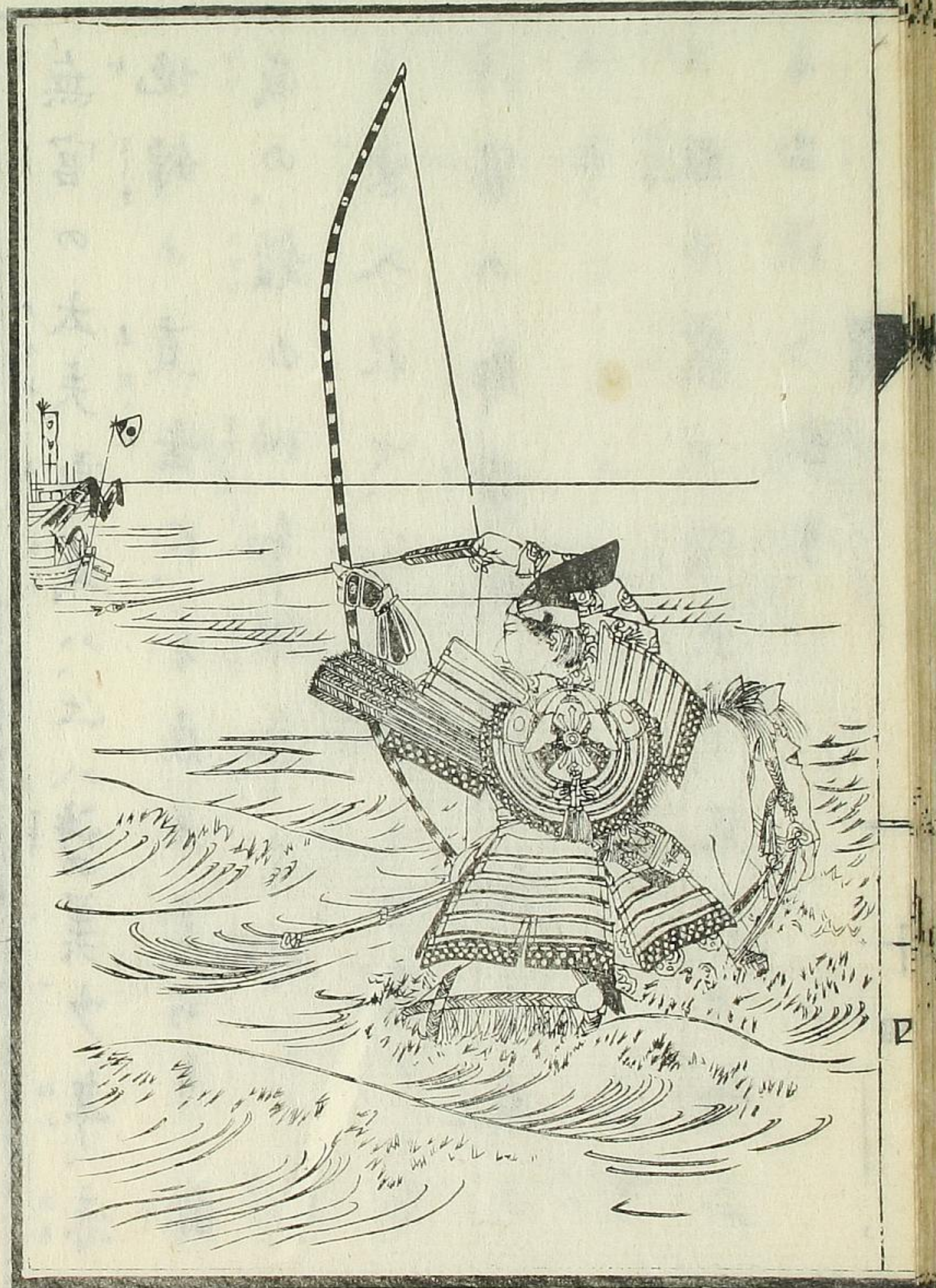


秩父の庄司重忠ハ一の谷ふる戦ひ
 り、鶴越に向ひいゝが、千尋の巖岨々
 といて、足を立づきよろもなき、義
 経朝臣の下知といて、三千餘騎
 比人々ハ、逆に馬を下りける、重忠
 馬を降りて、鎧の上に脊負つ、谷
 を下りい、舉動は、感ずぬものな
 らりりりり、

無官の太夫敷盛ハ、二八許の美少年、赤
 地錦の直垂に、もゑ立むり
 威の、鎧の袖を翻し、波間り馬
 を乗入れて、父の船えと急ぎらる、
 源家の郎黨熊谷が、招く扇不
 やきしくり、馬を返して直實
 の、双の露と消失し、哀れとゆふ
 もお海うふり、



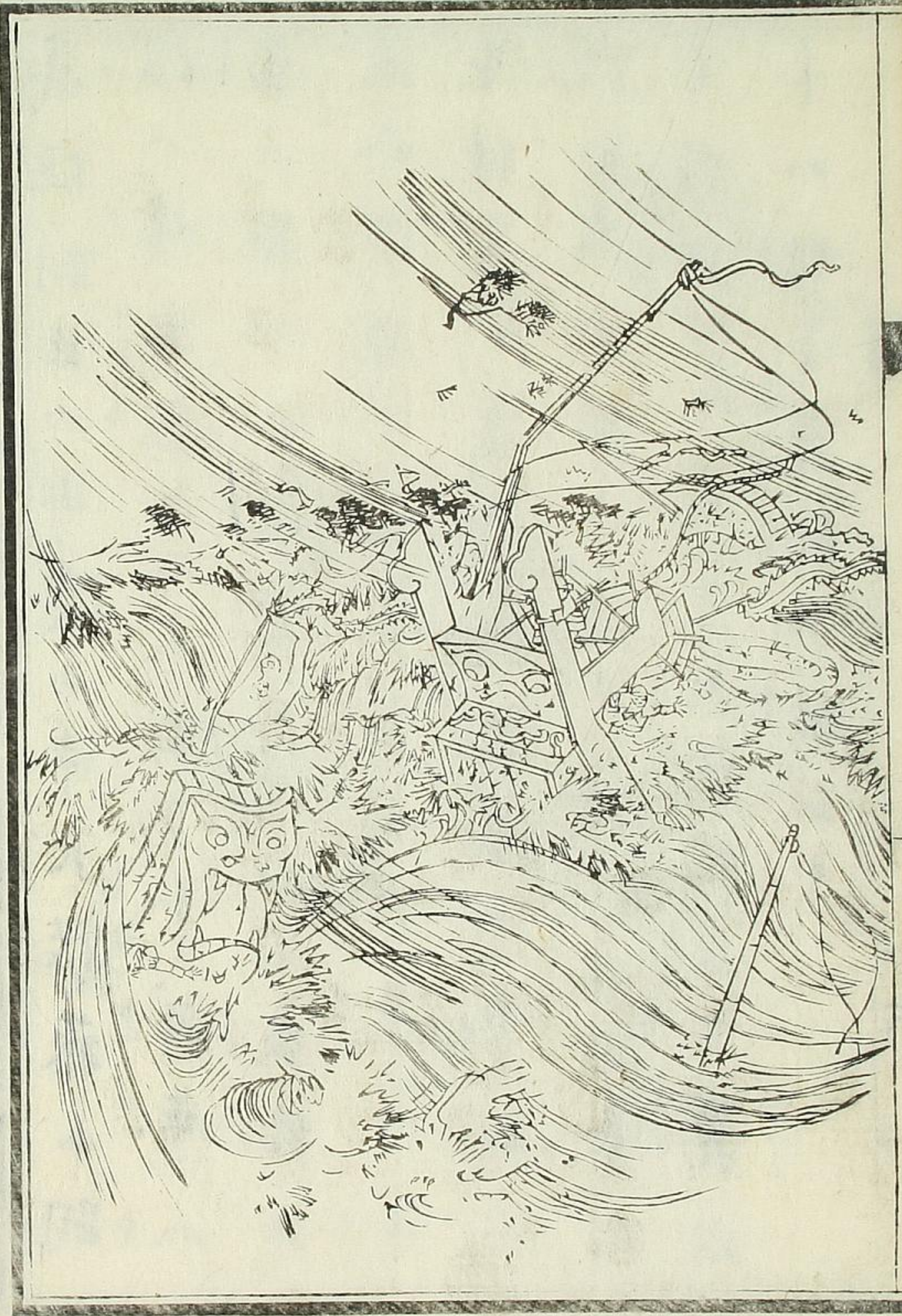
那須の與市の宗高ハ八島合戦の
 その時に、平氏の船の公達ハ扇を
 竿にさし、さきみ、おれを射よと
 て、麾、宗高衆ハ選られて、馬を
 静に乗出し、放つ矢先ハ何やま
 大虫、扇ハ空に翻り、夕陽を受了
 風に舞ふ、兩軍歡呼のその聲ハ、
 波々、響きて、やまざりし、



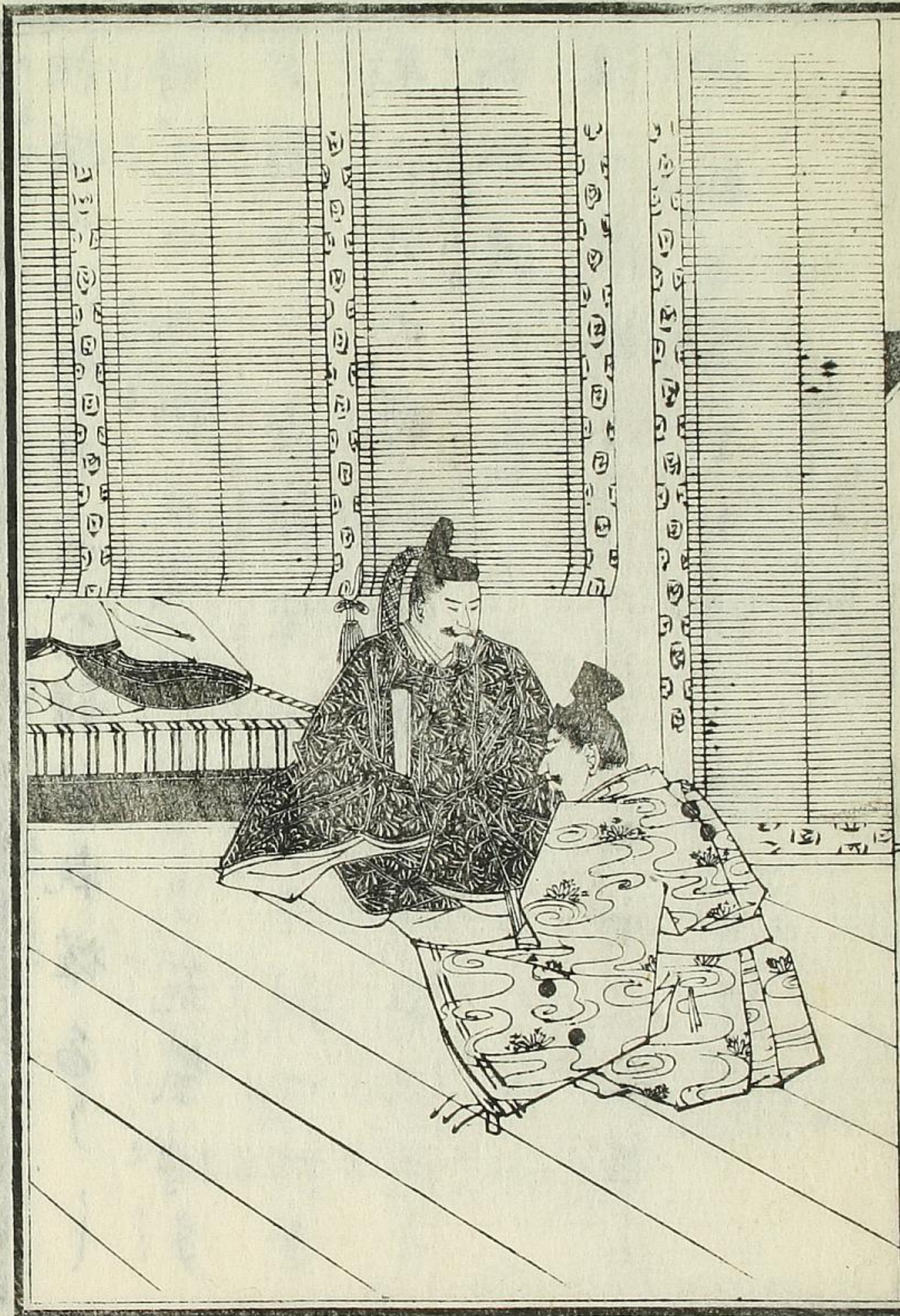


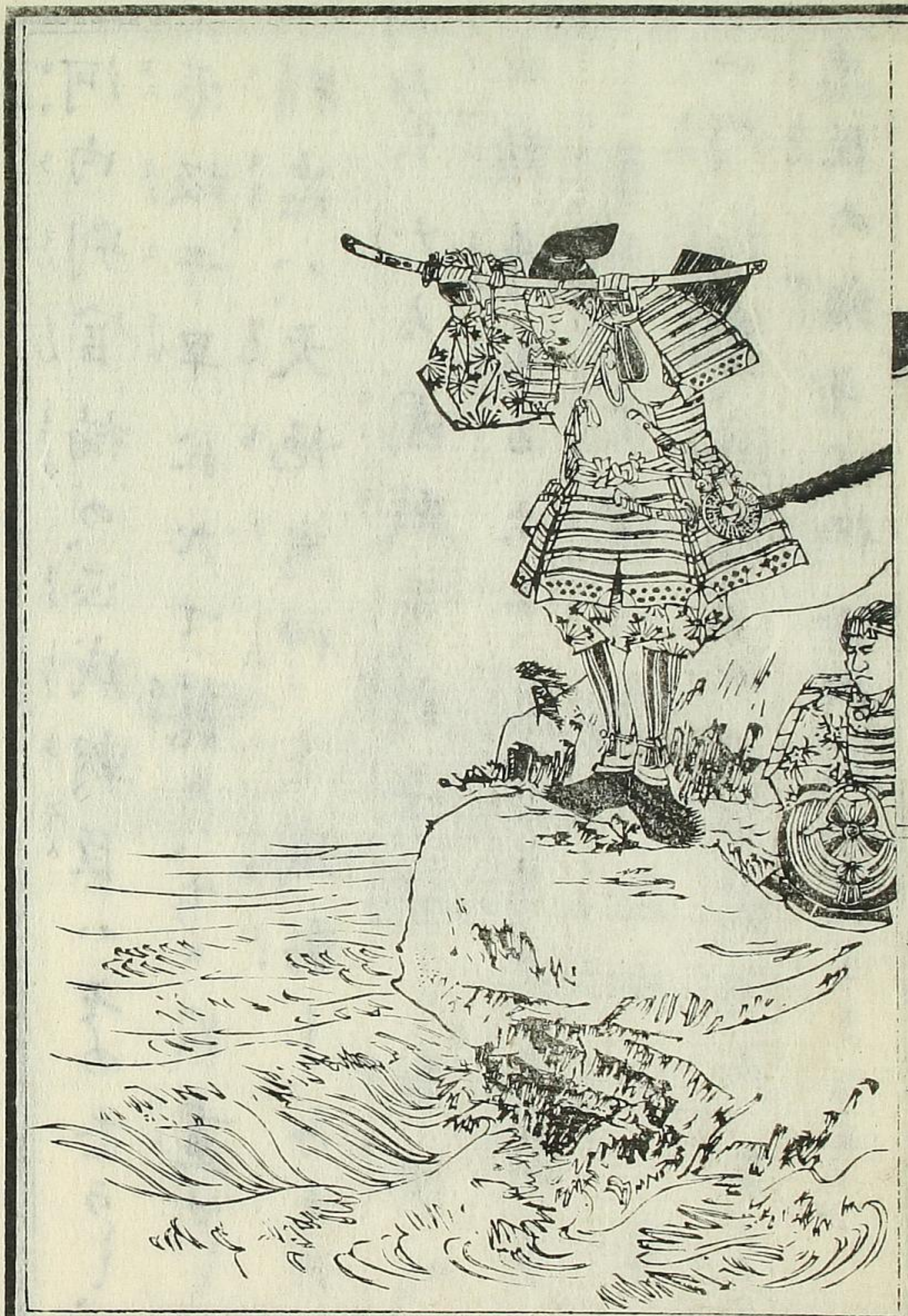
義経朝臣の郎黨の中に佐藤の嗣
 信ハ精忠無二の人ありし源平八
 島の戦ひに能登の守ふる教経が
 五人張ある強弓十三束の矢
 を津がひ、義経朝臣よりきし向ひ
 放たんとするその時に己お身成
 もておし隔て、矢先に立て焚水
 一ハ世に忠臣の鑑あり、

相模の太郎時宗ハ、鎌倉執権多りし
 時、元の太祖が威に石こり、筑紫博多
 に寇せしを、時宗諸将を誅て、防ぎ
 戦ふその時に、伊勢の神風吹起り、
 賊船波に覆り、十萬餘りの兵士ハ、
 海の藻屑とふりにひる、世々弘安の
 神風と、後々語り傳へり、



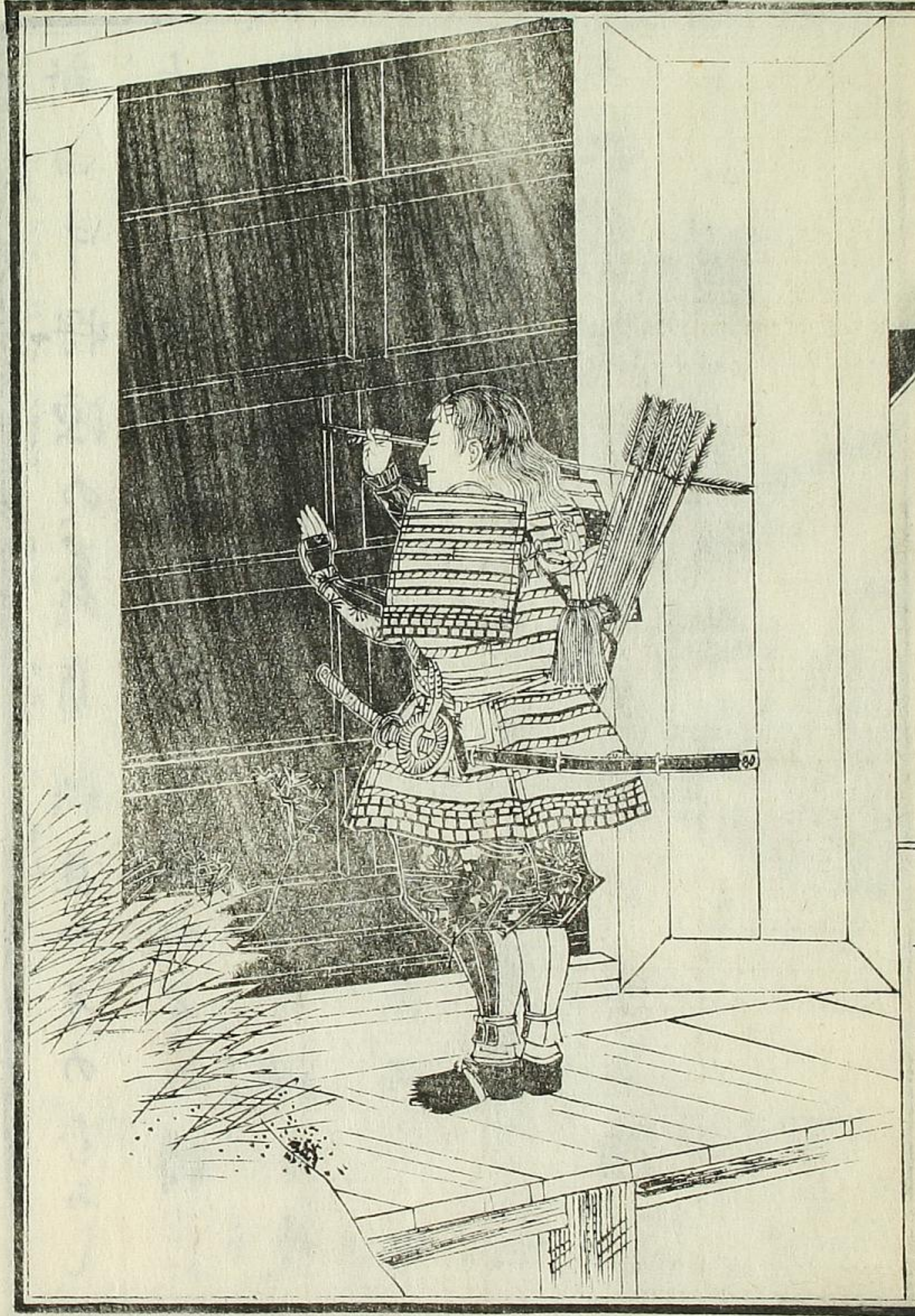
河内判官楠の正成朝臣ハそのむかし、
 赤坂千早にたて籠り、ちよに盡せし
 精忠ハ、天地鬼神を感動し、みちた
 みちたる國賊を討平げし勲功ハ
 比類希ある中ふり幾、又も報き
 一門打集、湊川をぞたをれりる、あ
 忠臣の鑑ぞと、仰おぬ人の名ありり、





新田中將源の義貞朝臣ハそのむあし、
 大義の旗を翻し、鎌倉攻のその時に、
 太刀を手に向て祈りぬる心を神に受
 玉ひ、かち渡る一き潮干鴻、立てし功
 の甲斐もふく、再び叛く尊氏を、好族
 勢を防ぎおね、越路に雪と消に
 一ハ、惜ても猶餘りあり、

楠朝臣正行ハ父の最期の滅を、堅
 心に守りつゝ、頃ハ正年戊子の年、
 家に傳へし菊水の旗を再び翻
 し、引のへきと榊弓、矢竹心
 の一竹助は、羣る敵に打向ひ、芳野
 の花と散ふり、後の世迄も尊
 りて、小楠公と稱へらる。



備後三郎高德ハ笠置の山に勤王
 の旗を一回擧ぐり、行幸の蹤を
 慕ひつゝ、何やめもこの如く暗の夜
 又、御所の御園に忍び入り、櫻を
 削り真心に赤き心の一花よ、矢
 立の筆の束の間に書残したる
 唐歌は、櫻の花と諸君にも後の世
 までもかんざしき、



越後の太守謙信ハ軍略智謀偉かし、
 甲斐の老将信玄と、兵を結んで解
 難し、秘術を盡す戦ハさあから龍
 糸の如きあり、川中島の一戦に、多
 年此恨晴さんと、獅子奮迅の勢
 をあし、電光稲妻水の月刃の下に
 信玄を、撃洩せしそ遺憾ある、



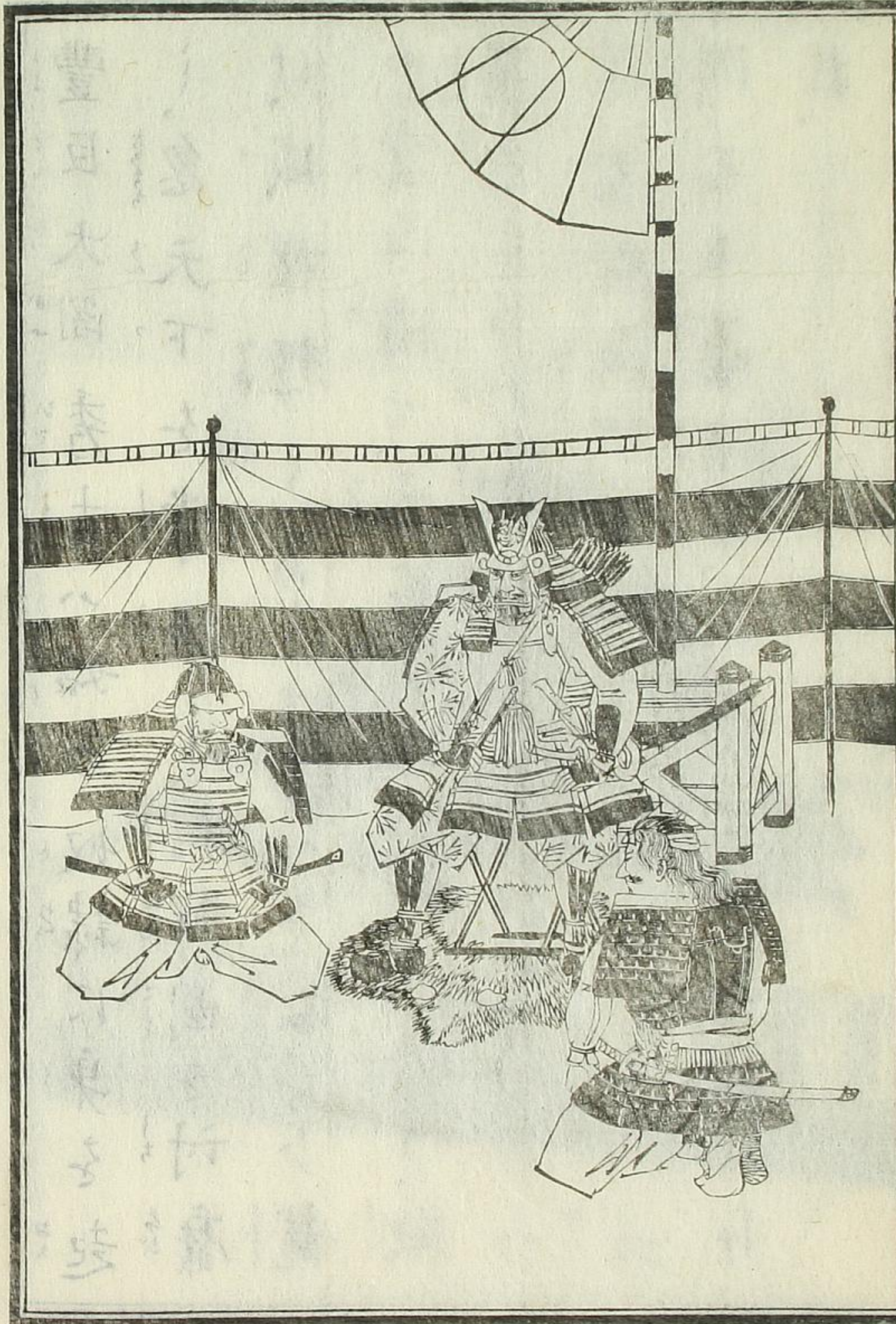
平の右府信長ハ夙に大志を抱き
 つゝ應仁乱のその以後ハ大義名分
 地ヲ墮して、群雄四方に割據せり、信
 長馬を鞭打て、天下の亂を定めん
 と、盡せし大やハ半途には、彼光秀
 の叛逆の刃の露と消にしも、太平
 の端緒を開きし君が遺せし勳
 功あり、



豊臣大閣秀吉ハ始め奴隸に身を起
 し、忽天下を掌握し、朝鮮國を討靡
 け、威權輝くありさまハをるが龍
 の雲を得て、天に昇るが如くなり、歐
 羅巴にち那勃翁亜米利加洲にハ
 華聖頓、亞細亞海にハ大閣を、五大
 洲なる豪傑の、三人とナラそ稱しけ
 れ、



征夷將軍徳川の、家康朝臣ハその
 清めて天下、弓ハ韃太刀ハ鞘、治
 する世の松年、枝も存ぶきぬ時津
 風、三百年の太平の基ありたる勲
 功ハ二荒の山に輝きて、東照宮の
 その徳を仰るぬものハあがり入り、



肥後の太守の清正の頃ハ文録正
 韓の、その先鋒に選れて、忠義の誠
 一をトよ、攻て拔ざる城もあく、討
 て勝さる敵もあく、妙法蓮華の
 旗の手に、民も草木もおろし、靡きハ
 道中よ、轟きし、その名も高き鬼
 將軍ハ唐土人と高麗人も、恐れぬ
 とのハありりりり、



明治廿四年八月十五日印刷
明治廿四年八月十八日出版

定價金拾錢

著者兼
發行者

東京府平民

長瀬義幹

東京府小石川區江古田町
壹番地居住

印刷人

東京府士族

高田以政

東京府小石川區表町
四十三番地居住



賣捌所

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂

同小石川區傳通院前大門町三十五番地

青山堂

010190529059

二

木
木寸
以
至

二